7 月 30 日のメッセージ

聖書：ペトロの手紙一　3：　13 – 22

「善を行って苦しむ方が」

「一寸先は闇」。私たちは人生のほんの一瞬でさえ先を見通すことはできません。だから、何か大事の前には逡巡してしまうのでしょう。

イエスが「わたしに従いなさい」と呼びかけられた時、ある人は「父を葬りに行かせてください」と言いました(「そして別の人に、『わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください』」と言った。」ルカによる福音書 9:59)。後顧の憂いを立ちたかったのでしょう。また、「石橋を叩いて渡る」つもりだったのかもしれません。しかし、イエスはそのような姿勢を一蹴されます(「イエスは言われた。『死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。』」ルカによる福音書 9:60)。神の呼びかけにはまず応えるのが先だ、と。

しかし、どんなに優れた、どれほど神を愛する人間だったとしても、限界があることを私たちは知っています。未来に苛酷な運命が待っていると知っているなら、誰しも戸惑い、逡巡するものです。それは、神の言葉を取り次ぐ預言者であっても変わることはありません。

命を狙われていると知った預言者エリヤは、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください」と願いました(「彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。『主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。』」列王記上 19:4)。もちろん、神はエリヤの願いを聞かれることなく、新たな役割を命じられます(「主はエリヤに言われた。『行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。』」列王記上 19:15)。

どんなに厳しい状況に置かれたとしても、私は確実にあなたを守る。だから、ためらうことなく、託された役割をしっかりと果たせ。示された道を一途に歩み通せ、と言われるのです。

「アーメン、確かにその通り」。聖書が伝える人間の歴史は、常にそのようにして神に守られてきました。それはよくわかっています。でも、自分たちを取り巻く現実はどうでしょう。

平和を願いながら、1 年以上戦火に苦しめられている者たちがいます。自分らしく生きたいだけなのに、様々なバイアス(偏見)が「普通」の日々を送ることを邪魔しています。不安なく過ごしたいと願っているだけなのに、強者の論理が大手を振ってまかり通っています。「主よ、いつまで」と問いたくなるような毎日が続きます(「いつまで、わたしの魂は思い煩い／日々の嘆きが心を去らないのか。いつまで、敵はわたしに向かって誇るのか。」詩編 13:3)。

そのような中では、やはり「長いものには巻かれろ」という生活を送った方が楽だと思えてくるのではないでしょうか。「今さえやり過ごせば」「自分さえ良ければ」という考えが頭をもたげてきます。

そこに、神はもう一度、呼びかけてくださるのです。

あなたたちが置かれている現実は厳しい。ましてや、そこで神に従い、善を行うことには多くの労苦が伴うだろう。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」(ルカによる福音書 9:58)。そんな風に思っているかもしれない。

しかし、「あなたはどう生きたい」のか。自分の本心を隠し、あるいは偽り、長いものに巻かれて何となくその場をやり過ごしたいのか。それとも、自分も含めて、全ての者がより良く、より豊かに生きられる世界を目指すのか。

「神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。」(ペトロの手紙一 3:17)

確かに現実は厳しい。そのことを受け止めた上で、改めて、一時の艱難に臆することなく、神の愛を、真の平等を、真の平和を語る一人でありたいと願います。